「十字架と復活」

コリントの信徒への手紙一 15 章 12～34 節（20～28 節）

聖学院院長・キリスト教センター所長　山口　博

その昔、教会が世間へ語った最初の言葉は、20 節の「しかし、実際キリストは死者の中から復活した」と言うことばでした。「互いに愛し合いなさい」でも、「神を礼拝しなさい」でもありませんでした。それはキリストが十字架につかれた直後ですから当然かもしれません。しかし、この言葉は今日まで繰り返し語られてきたのです。救いの全てはここに集中しているからです。

私どもが失望落胆している人に、「しかし、実際キリストは死者の中から復活した」と言えるとしたらどうでしょうか。受験に失敗した人にこの言葉を語っても無関係のように思えるかもしれません。しかし、生活のありとあらゆることが死に連なっていることが分かると、この言葉の深さがわかってくると思います。

次に 20 節後半に「眠りについた人たちの初穂となられた」と綴られています。復活の最初の人としてキリストがよみがえられたという意味でありましょう。私どもの生活は自分の健康や毎日の生活で一喜一憂していますが、それらは本当の望みにはなりません。本当の望みとは死から救ってくれるものでなければならないからです。そして、そのことを具体的に説明するために 22 節の「アダム」のことが綴られるのです。21 節「死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。22 節「つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです」と綴られています。聖書はアダムから罪と死が来たとはっきり告げています。そしてキリストの復活から救いが来ると語るのです。

その後にキリストがどういう意味でおいでになるかを記しています。23 節は分かりにくいかもしれません。「ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます」と記されています。詳しく書いてありませんから順序そのものはあまり問題ではなさそうです。確かなことは、キリストによって復活が起こってくることです。そして、その内容は信仰によることであって私どもが知的に悟りうることとは違います。したがってそのすべてのことは神に委ねるほかはありません。26 節では「最後の敵として、死が滅ぼされます」と書かれています。なぜ復活だけが死に対する力なのでしょうか。復活は死んだ人がひょっこり生き返ってきた話ではありません。そこには罪の贖（あがな）いの十字架があります。死に勝つとは不老不死ではありません。罪と死に勝つ道は復活以外にはないのです。このことは誰が望んだのでしょうか。われわれが願うのは当然かもしれません。しかし、聖書によれば神が望み、神の勝利があらゆる人間の勝利となると語り伝えているのです。

2024 年 4 月 16 日　聖学院大学　イースター礼拝